

図書館の徹底活用術⑫

生活の中の経験を通した学びへの着眼
Pestalozzi『白鳥の歌 (Schwanen Gesang)』に寄せて

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館の有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」という実践活動や経験を通した学びに焦点を当てつつ前回は、Bakhtinの『言語と文化の記号論』（北岡誠司（訳）新時代社、1980）になぞらえつつ、共同体の中の「対話」に着眼しました。そしてこれを更に深めることを予告しましたが、その前の整理として、今回はペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）の『白鳥の歌（Schwanen Gesang）』に着眼したいと思います。

スイスのチューリッヒ出身の教育学者であるPestalozziは、ルソーの「自然主義の教育」の影響を受け、「合自然の教育」の理念の基にコメウスの理論を発展させた直観教授、問答により子どもの心性の開発支援をする「開発教授」などの教授法を提案し、近代教育に大きな影響を与えました。

そのPestalozziが著したものに“Schwanen Gesang, 1826”（佐藤正夫訳『白鳥の歌』玉川大学出版部、昭和34年）があります。この中で有名な名言は「生活が陶冶する（Das Leben bildet）」という表現で、これは、人間発達の自然的並びに基礎的な手段を道徳的生活・知的生活並びに産業的生活の3方面から探求し、「それは自然的法則に従って児童の道徳的・知的並びに身体

的の諸力を完全な均衡を保たしめて発達させることになる」としています。これは、生活という根本の問題が如何に人間の発達にとって重要なものであるのか、そして同時に有効なものであるのかに関して言及している箴言にも等しい捉え方だというのができます。

このことは、家庭生活に於ける人格形成や諸能力の調和的発達の意義と共に、人間生活の基本である労働にも着眼し「労働が人間をつくる」という意味で解釈することができます。

つまりは、労働によってその労働に相応しい職業的能力が形成される（この場合、所謂、生き甲斐に通じるような生業としての労働、及び社会と自己とを結び付ける自己存在と関係する労働を意味します）ということになります。

こういった関係性を皆さんの学習拠点である図書館での活動に当て嵌めて考えてみて下さい。まずは、この学習拠点の中に入って、そこで試行錯誤しながら活動するという学生生活が皆さんの学生としての人格を形成し、同時に、学習の為の能力を調和的に発達させることに繋がるということが出来ます。その為の支援をする最初の窓口がレファレンスサービスであり、そこで展開される「対話」に中にこそ学びがあるということが出来ます。

えだもと ますひろ(准教授・図書館学・教育学)